

角館武家屋敷通り

元和6(1620)年ごろ、当時角館を治めた蘆名(あしな)義勝が造った町割りが残る。蘆名氏断絶後は佐竹北家へ引き継がれ、昭和51(1976)年、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。

PC プレス
2025 / Jan.
vol.036

Index

- #001 秋田 秋色の秋田に魅せられて p.01
[名橋をめぐって]
- #002 鳴瀬川橋梁 p.11
池田へそっ湖大橋
- #003 [こんなところにPCが!]
岐阜市役所立体駐車場 p.16
- #004 [明日を築くプロジェクトの風景]
NAGASAKI STADIUM CITY p.18
- #005 [研究・教育の現場から]
新潟大学 自然科学研究科
環境科学専攻 p.22
社会基盤・建築学コース
セメント・コンクリート研究室
- #006 仕事場拝見 p.24
- #007 [よくわかる! PC 基礎講座]
プレキャスト工法の活用(その4) p.27
- #008 PCニュース ~北から南から~ p.28

謹んで豪雨災害の お見舞いを申し上げます

令和6年9月からの台風・大雨による災害で
お亡くなりになられた方のご冥福を
お祈り申し上げますとともに、
被災された皆さまへ心よりお見舞い申し上げます。



表紙のイラスト / 秋田県立美術館
「秋田 秋色の秋田に魅せられて」で訪ねた、秋田
県立美術館内のらせん階段をイラストに描いた
ものです。

長い長い夏をクーラーの効いた部屋でやり過ごし、なかなかやつてこない秋を待ちかねながらのんびりと次の旅先を探していると、懐かしい音楽と声がテレビから聞こえてきた。2024年秋公開の映画『室井慎次 敗れざる者』『室井慎次 生き続ける者』のCMだ。両親と一緒にレンタルビデオで『踊る大捜査線』シリーズを一気見した記憶がよみがえる。織田裕二扮する刑事・青島が、

広報誌の名称について



は
コンクリート(C)にプレストレス(P)の力が
作用した様子を表現したもので、
「プレス」は定期刊行物を意味しております。

秋色の秋田に魅せられて

秋田

組織に翻弄されつつも信念を貫き成長する姿を、時にコミカルに描く刑事ドラマだ。

今回の映画の主役である柳葉敏郎演じる室井は、警察のキャリア。最初は反目していた青島を次第に認め、警察組織の改革にむけ奮闘する役だ。映画はその室井が警察を辞めて故郷の秋田に帰り、事件に巻き込まれることから始まる。多くのロケは実際に秋田、それも柳葉敏郎の地元で撮影されたらしい。小さい頃から親しんだ室井の後日譚ということで映画を見に行ったら、室井が愛した秋田の空気を味わいに行きたくなってしまう。だって「事件は会議室で起きてるんじゃない、秋田で起きてるんだ！」。

調べてみたら、秋田県内にもやっぱり見ておきたいPC橋がたくさんある。さらに秋田市にはPCが大活躍する構造物や建築まであるじゃない！こんな面白そうなものを見逃さない。うん、やっぱり今回は秋田の魅力を探査しに行こう。映画のロケが行われた大仙市をスタートして室井の出身地という設定の由利本荘市をまわり、秋田市に向かうのはどうかしら。秋田のシンボル、なまはげにも会わなきゃ帰れない。紅葉がきれいに色づく頃、新幹線に乗って秋田へと向かった。



▲ 抱返り溪谷と神の岩橋

田沢湖から角館を通り、玉川へと続く溪谷。抱返神社のある溪谷入口からは全長80mの「神の岩橋」が架かる景色と紅葉を楽しめるほか、片道1.5kmほどの散策路もある。

東京より一足早い 紅葉の溪谷美を堪能

秋田県仙北市にある角館駅前（かくのすゑ）でレンタカーを借り、まずは抱返り溪谷へ。紅葉祭りののぼりをたどると、深い

青の水を湛え赤や黄色に彩られた溪谷が姿を現した。秋田県内で最も古い真つ赤な吊り橋「神の岩橋」がアクセントになり、絵画みたいな風景を描き出している。目の前の溪谷美を体に全部取り込むようなつもりで、大きく深呼吸をして車に戻った。

次の目的地へと向かう道すがら、秋田県立角館高等学校を遠目に見る。こちらでは犯罪被害者の子ども、里親として暮らしているという室井の里子の少年が通う高校としてロケが行われた。柳葉自身の出身校ということもあり、出演シーンがないにも関わらず現場を訪れ撮影を見守っていたそうだ。撮影終了後にはエキストラ出演した生徒たちにエールを送ったというから、お互いにいい思い出になっただろうな。映画のワンシーンを思い返しながら校舎を通り過ぎるとすぐに、秋田有数の観光地・武家屋敷通りにたどり着いた。

「みちのくの小京都」 秋の角館をさんぽ

江戸時代に造られた町割りがそのまま残るまち、角館。武家屋敷が連なる「内町」には、まっすぐな道に整然と黒い板塀が並ぶ。忠義に生きる武士たちの無骨で誠実な生きざまを映したような通りが、今は紅葉の錦に

彩られている。中でも青柳家はその功績により特別に許された薬医門をはじめ、上級武士の屋敷としての建築様式を見られる場所だ。飴色の光沢を湛える趣深い建屋にも見とれたけれど、歴代当主の物持ちの良さにも感動！刀や槍、火縄銃、鎧などがずらりと展示され、持つてみるとずしりとした重みに武家の暮らしの一



▲ 青柳家 薬医門

青柳家は約400年前から角館藩主に使えた武家。母屋は約200年前のものが現存し、重厚な薬医門には万延元（1860）年の銘が記された矢板が残る。

▼ 樺細工

秋田北部から藤村彦六により技法が伝えられ、藩の庇護のもと下級武士の内職として樺細工が広まる。現在は仙北市の富岡商店などが、伝統技法に新たな技術を加えたモダンな製品を作り出している。



端を感じる。加えて、大正時代の新聞や生活雑貨、趣味人な当主の昭和レコードコレクションなど、青柳家がつむいでできた時代の生きた資料の数々も目にする事ができるのだ。他にも『解体新書』の挿画を担当したのがここ角館出身の青柳家にゆかりのある小田野直武だとか、角館や秋田の魅力をあらゆる角度で知ることが出来る場所だった。

あちこちの屋敷やショップをのぞきながら歩いていると、独特の艶を帯びた雑貨を発見。山桜の樹皮から作られる「樺細工」という角館の伝統工芸品だ。渋いデザインも素敵だけ

▼第一玉川橋梁

平成8(1996)年、秋田新幹線開業に合わせ完成した橋長188mのPC3径間連続斜張橋。たわみを抑え走行安定性を高めるためPC部材を用いた斜張橋構造を採用。豪雪地帯に配慮し塔頂部に横梁を設けていない。



ど、幾何学的なデザインを取り入れたひとときモダンなブローチにひと目ぼれ！旅の出会いは一期一会だし、自分へのごほうびだし…とレジへ向かい、早速思い出を身につけた。

**新幹線乗り入れを支えた
秋田に羽ばたく鉄道橋**

角館をあとにして玉川を渡るとき、西側に見えるのが田沢湖線（秋田新幹線）の鉄道橋、第二玉川橋梁だ。斜材にPC部材を使うことで列車が安定して走れるようにした斜張橋で、コンクリートで覆った斜材が羽を広げまっすぐに飛ぶ鳥のようでかっこいい。

平成9（1997）年開業の秋田新幹線は東北新幹線の東京〜盛岡区間を走行後、盛岡〜秋田間は在来線の田沢湖線・奥羽本線を改良し、秋田新幹線が直接乗り入れられるようにしている。最高速度は130km/hとゆっくりめで車両も小ぶりだけれど、乗り換えなしで秋田へ行けるのはやっぱり便利だ。それに在来線と同じ場所を走るので防音壁などもなく、走行中の車両を間近で見られたり、車で並走できたりと、鉄道好きには嬉しいおまけがついてくる。というわけで、おまけを狙いに次の橋へGO！

**桜色のかわいい橋で
「こまち」に遭遇**

玉川から線路に沿って南下すると、齊内川橋梁が見えてくる。こちら、なんと架け替えを一夜で完了させた橋なのだ。既存の橋の隣で新しい橋を作っておき、当日は終電〜初電までの間に一気に橋桁を横に移す「横取り」という方法で架け替えられた。やりとげた現場の方々の技術に心が躍るし頭が下がる…と当時に思いを馳せていると、

列車の音が聞こえてきた。スマホを構え、赤い頭の秋田新幹線「こまち」が桜色の橋を渡る一瞬を収める。ちなみに齊内川の土手は桜並木が続いていたの

で、橋の鉛直材も桜色に塗装したそう。今は工事のため桜の木はないけれど、終わったらまた植えられる予定。桜と橋と「こまち」のかわいい競演が見られるようになったら、もう一度見に来たい。

「道の駅なかせん」の前で右に折れ県道256号を進んでいると、道の両側にずらっと見慣れた木が並んでいるのに気がついた。全部桜の木だ！調べるよこのあたりも桜の名所で、1kmほど続くこの道は桜アーチ街道と呼ばれているらしい。これは壮観！武家屋敷通りもシダレザクラが有名だし、春に旅をしたら淡く染まった景色に出会えるはずだ。

▼齊内川橋梁

堤防決壊による浸水被害対策のための河川改修事業により、令和2(2020)年に橋長55m4連の鋼単純桁から橋長71mのPC単純ランガ―橋へ架替を行った。雪を積らせないため開床式を採用した初の鉄道橋。



▼新強首橋

強首輪中堤整備事業により架け替えた、雄物川中流域にかかる橋長400mのPC6径間連続箱桁橋。



暴れる雄物川の治水に取り組む新強首橋

さて、次は由利本荘市を目指して大仙市を西へ横切る。映画には「だいせん」と書かれた看板が出ていたから、きっとこのあたりでも撮影しただろう。映画で見た景色がないか、辺りを眺めながらのドライブだ。

しばらく行くとあきたこまちを育む川、雄物川が姿を現した。もたらす恵みも大きいけれど、大雨が降ればたびたび氾濫する暴れ川として昔から人々を悩ませてきた。その水害対策工事の二環で架け替えられたのが新強首橋だ。施工性、経済性、メンテナンス性などの向上を目的とした外ケーブル方式は、建設省(現国土交通省)の新橋建設工事



▲発酵小路 田屋

齋彌酒造店が営むショップ&カフェ。発酵をテーマに地元の食材が楽しめるカフェでは、仕込み水を使った自家製パン、塩麴や酒粕に肉や魚を漬け込んだ料理を楽しめる。



▲クリーム本荘うどん

湧き水と厳選素材、昔ながらの自然乾燥製法がつるりとしたのどごしと歯ごたえを生む本荘うどんは由利本荘の特産品。「雪の茅舎」の酒粕に漬けこんだ鮭をトッピングしている。

では初めて採用された。対策はぼつちりだけど、できれば今後はこののどかな風景の中、ただゆつたりと流れていて…と川の神様に願った。

由利本荘の「おいしい」をひと皿でよくばるランチ

山里を抜けて由利本荘市に入ったのはお昼どき。実はこれから、ある日本酒の蔵元にお邪魔する予定だ。その前に蔵元が営む「発酵小路 田屋」でランチタイムだ。悩んだ末に注文したのは酒米を削ったときにできる「米粉」のホワイトソースと、秋田を代表する調味料「しよつる」で絡めた「クリーム本荘うどん」。由利本荘と秋田の味覚を二気に味わえる一皿だ。つるつるとした細いうどんとソースが意外にも相性抜群な上、

あつさりしていて罪悪感もなし！ペロリと完食してしまった。

秋田屈指の名蔵元「齋彌酒造店」を特別に見学

蔵を見学させていただいたのは、明治35(1902)年創業の「齋彌酒造店」。女人からの評価も高い「雪の茅舎」などを醸造する名蔵元だ。

「実は今日、今年の新酒ができ上がったところですよ」と、青々とした杉玉を見上げながら蔵人さんが案内してくれた。「のぼり蔵」という珍しい造りの酒蔵は、焼き物の「登り窯」と似ていることから命名されたとのこと。傾斜地を生かして一番高い場所に運んだ酒米を、斜面を降ろしながら工程を進め、ふもとに到着すると同時に酒が完成するエスカレーターのような仕組みになっている。

日本酒造りはまず原料となる酒米を磨き、雑味を削り取った米を浸水させ、蒸す。一部は麴菌をふりかけて麴を、他方で酒母を造り、樽に水と合わせて仕込む。これが発酵して原酒になる。蔵の歴史からすれば、麴室や蔵が驚くほどきれいなことが不思議で聞いてみると「汚れる前に拭き掃除を、というのが合言葉です」。「できるだけ人の手は入れず、微生物や菌たちが自分たちの力で良い酒を造る



◀▼ 麹室・蔵
平均30℃。壁や天井、全面に貼られた杉板が湿度を30%以下に自然と調節。2日間杜氏が手をかけ見守り、酒米が糖化し麹となる。蔵では14日間かけてタンクの中で発酵させる。



▲ 齋彌酒造店
創業時の姿を残す日本家屋と洋風建築が融合した店舗と蔵は、1998年登録有形文化財に指定。



▲ 雪の茅舎
全国新酒鑑品会で幾度も受賞歴を持つ銘酒。大吟醸や山廃造りなど、仕込み方によりさまざまな酒がラインナップされている。いずれも風味をそのまま届けるため原酒で瓶詰めされる。

ための環境を整えることに力を尽くすのがうちのポリシーで、目に見えない埃や雑菌もこまめに拭きとります。昔のやり方を復活させて消毒にも薬品は使いません。それでも麹室の杉板も、40年前に張り替えたとは思えないきれいだでしょうか？」と誇らしそうな笑顔が輝いた。

また齋彌酒造店では、麹も酵母も自家製を貫く。酵母は創業時の原酒を大切に保管し、変わらない味を受け継げるようにして、酒の元にもなる酒母造りは旨さを追い求めて、「山廃酛」を造っている。蔵に住む乳酸菌が自然とゆつくりと醸すので蔵元の特徴がお酒によく出るのだとか。麹米、酵母、酒母と蔵にこんこんと湧く仕込み水を加えたら、ぶくぶくと発酵する力で自然に攪拌されるのに任せ、酒になっていくのをそつと見守る。こちらでは日本酒の仕込みと言えれば想像する「權入れ」をせず、毎日

タンクの上から「顔」を見て様子が違うときだけ手助けをするんですって。お話を伺うほどに、心から微生物の力を信じ、温かく見守る酒造りをされていることが伝わってきた。「私達小さな蔵は、味に個性がないと生き残れません。多くは造れないけれど、美味しいと選んでもらえる酒をお届けしていきたいのです」。

雪に閉ざされる中、素晴らしい腕を持つ杜氏たちを生んできた秋田。その魂を注ぎ込んで造られた味をしつかり受け止めようと、幾本も買い込んで車に戻る。ああ、運転さえなければ、試飲をおすすめされた今年初の生酒、飲みたかった……！

**直接潮風を浴びながらも
堂々とたたずむ雄物大橋**

秋田市に向かって日本海沿いを北上していると、沿岸では強い海風を受けてたくさんの風車がぐるぐると回っている。雄物川の河口に架かる雄物大橋は、海岸から遮るものがない潮風を受けてもおおらかに構えているように見えた。「のぼり蔵は風通しが良くて酒造りに良い環境です」と蔵人さんの声が耳の奥から聞こえてきた。時に怖ろしくなるくらい豊かな自然の力を、秋田の人は本当に上手に借りて生きている。

▼ 雄物大橋
橋長394mのPC6径間連続箱桁橋。雄物川河口から600mと距離があるものの、遮るものがなく塩害対策レベルを引き上げて施工。エポキシ樹脂塗装鉄筋やエポキシ樹脂被覆PC鋼材を採用するなどの腐食対策が行われた。





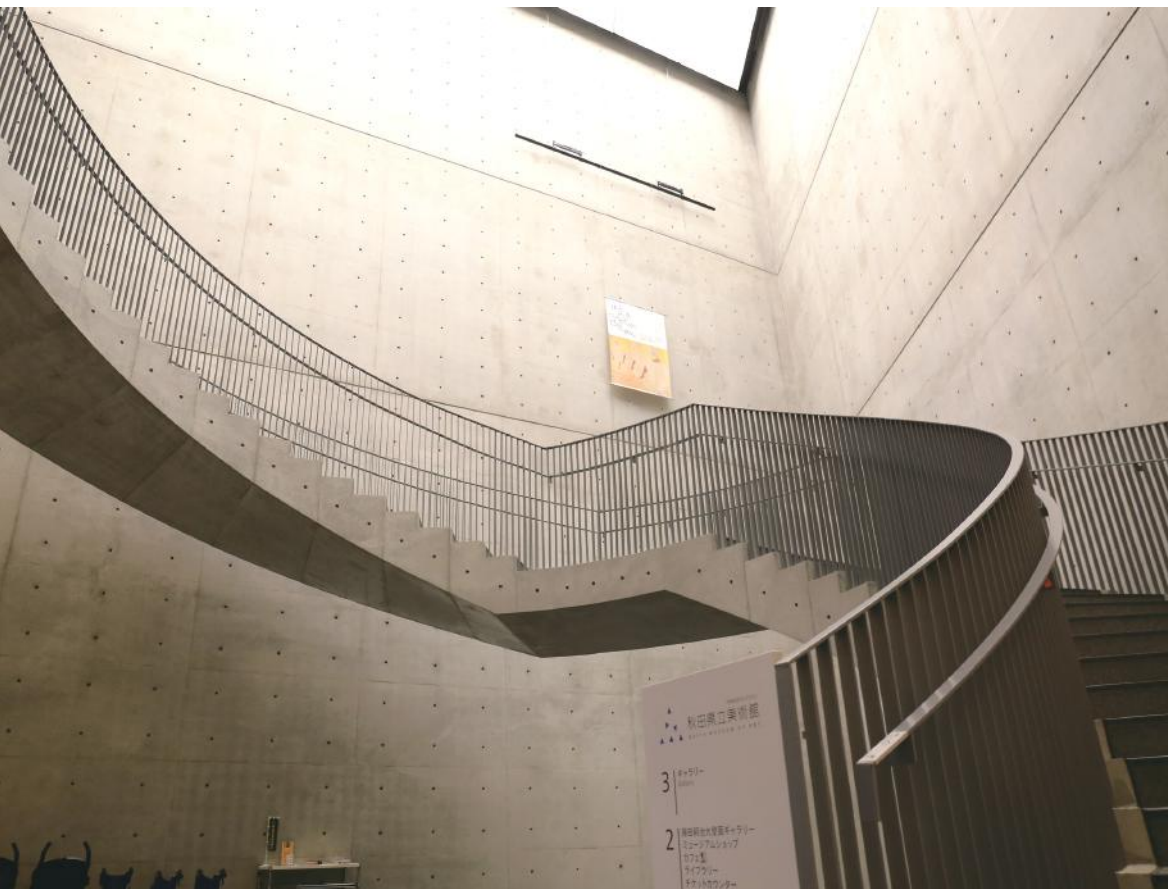
「雪の茅舎」片手に
あつたかきりたんぼ鍋

▲きりたんぼ鍋
きりたんぼはすりつぶしたご飯を杉の串に握るように巻き付け、表面を軽く焼いた秋田の郷土料理。地域により鍋の味付け、食べ方は異なる。なお、室井慎次の特技はきりたんぼ鍋づくりという公式設定がある。

秋田市街に入るところにはすでに夜。ホテルに荷物を置いてきりたんぼのお店へ。映画で室井が炉端で作る様子を見てからずつと食べたくて……！
比内地鶏の澄んだだしの中、ごぼうとせりが野趣ある味わいを添える鍋に、くつくつときりたんぼが浸かっている。ほろりと崩れそうなそれを口へ運ぶと、米の粒感がほどよく残るもっちり感と、あきたこまちの甘みが広がった。そこでお店に置いてあった「雪の茅舎」を一口。飲みごたえがあるのでフルーティで爽やかな飲み口は、次々杯を重ねてしまふ。腹の底からぽかぽかと温まり、ほろ酔いの楽しい夜が更けていった。

秋田県立美術館で登る
非日常へのプロムナード

翌朝は、芸術の秋らしく秋田県立美術館へ。吹き抜けのエントランスで、宙に浮かぶPC構造の階段に迎



えられる。床からの支柱や壁と接する面はなく、2階の外壁と踊り場を繋ぐPC鋼材と、階段全体に通したPC鋼材がらせん階段を支えている。一歩上がるたび、ふわりと現実から遠ざかり美術の世界へ誘われてゆく。

▲▼ 秋田県立美術館
秋田市中心部の名勝「千秋公園」に面して建つ、安藤忠雄設計のコンクリート建築。らせん階段は、高さ6.3m、長さ21.1mのPC構造。



常設展示場に入ると、藤田嗣治による壁画『秋田の行事』が視界に広がる。フランスの流行画家だった藤田が、秋田の資産家であり美術蒐集家でもあった平野政吉と出会い、日本滞在中に米蔵で描いたものだ。秋田の静かな日常と、熱気が迸るような祭の情景が壁画から迫ってくる。昨日角館で知った『解体新書』を手掛けた小田野直武も、のちに洋風画を描き『秋田蘭画』の確立に一役買ったというし、秋田は芸術家の才能を刺激するまちなのかもしれない。

▶ 豊岩配水池

緊急時給水拠点確保事業の一環で、平成12(2000)年に豊岩浄水場内に造られたPC造の配水池。電動ポンプに頼らない自然流下方式を採用。



▲ タンクの内径は42m。最大水深13mまで貯水が可能で、通常は有効水深8mまでが使用されている。海拔58mにある流入管より上部に設置された点検口からの様子。



巨大なPC構造の配水池から 秋田市街を一望

秋田市上下水道局の方との約束の時間が近づき、郊外へ車を走らせる。PCで造られた巨大貯水タンクの見学を快く受け入れて下さったのだ。

PCタンクがある「豊岩配水池」は、標高45mの高台にある。災害時に停電しても位置エネルギーだけで市内に水を安定して供給できるように造られた、秋田市民にとって重要なインフラ施設だ。一基あたり最大1万8000m³貯水できるPCタンクは、かなり大きい部類なので、実際に見るのを楽しみにしていたのだけど：近くで見上げると圧倒されそうな巨大さだ。このタンクの側面に縦と円周にPC鋼材が入っていて、水圧に負けないようになっていて、「ちょうど今日、全部水を抜いて中の掃除をしているんです。覗いてみますか？」なんと5、7年ごとにしか行われないう清掃日に遭遇！階段の上から覗かせてもらうと、作業用ライトに各家庭への水道に繋がる一番底のピットが照らされていた。水が入っていたら見えなかった、タンクの要が見られて胸いっぱいだ。

さらに「小学生の社会見学だと、屋根の上に登るんですけど行きませんか？」とお誘いが、もちろん行く！

ゆるくカーブのついたPCタンクの屋根を、避雷針のそばまで登って振り返ると、雄物川の向こうに秋田市街が広がっていた。

「川向うに見える仁井田浄水場では現在、施設の更新作業が行われています。耐震化と、人口減少に合わせてダウンサイジングし効率的に運営するための工事です。この豊岩配水池は、今まで仁井田からその秋田南大橋の送水管を通して水を運んで貯めていたのですが、工事完了後は豊岩浄水場の余っていた処理能力を最大限に活用し、豊岩浄水場からも送水できるようになる予定です」との説明に耳を傾けていたのだけど：ちよつと待って、秋田南大橋？目を凝らして見てみると、立派なPC橋じゃないの！

「存じなかったですか。秋田南大橋とこの施設はセットです。あの橋に添架されている送配水管がなければ、水を市内に送れない大事な橋です」と、色めき立つ私を見て笑いをこらえながら職員の方が教えてくれた私の事前捜査網から漏れていたものがあるなんて、なんたる不覚！だけど、上下水道局の方と別れて秋田南大橋左岸の橋桁の下に顔をのぞかせていた送配水管を見上げて思う。こういう発見があるから現地めぐりって面白いのだ。

▼ 秋田南大橋

平成9(1997)年、秋田市街の渋滞緩和をめざしたバイパス工事の一環で架けられた、橋長689mの2連のPC5径間連続箱桁橋とPC単純中空床版橋。送配水管は、箱桁部は桁内に、中空床版部は桁下に添架。





▲ **男鹿大橋**
平成14(2002)年に拡幅工事と同時に、活荷重の増大への対策として外ケーブルの補強工法を、塩害対策として電気防食工法を実施。

▼ **なまはげ立像**
男鹿市への入り口では、2体の高さ15mの巨大ななまはげが出迎える。記念撮影スポットとして大人気。



男鹿大橋のたもとで 巨大ななまはげに遭遇！

旅も終盤となり、男鹿市にあるなまはげ館を目指す。国道101号を順調に北上していると、突如なまはげが現れた！男鹿市観光案内所の入口に建つ巨大な像は、おそろしい顔をした人気者だ。多くの観光客が車を止め、にこにこ撮影している。私ももちろんパシヤリ。ここを過ぎれば男鹿大橋だ。橋の北側に見えるのは八郎潟。日本最大の干拓地として、授業で何度も耳にした場所だ。先のパリオリンピックで銅メダルを獲得した、バドミントンの志田千陽選

日本海側に来たからには ぴちぴちの海鮮で満腹に

手はここ八郎潟町の出身だ。そして橋の南側には日本海が開けている。やはり塩害が問題だったことから、補強工事に合わせて電気防食工事が行われた。潮風への対策も時と場合に合わせてさまざまと合わせているところが、さすが島国の技術者たちだ。

日本海に突き出るかたちの男鹿半島は昔から漁が盛んで、豊かな海の幸に恵まれている。となればどうしても食べて帰りたくて男鹿海鮮市場



▲ **お食事処海鮮屋**
男鹿の船川漁港で水揚げされる魚介を、シンプルな調理で味わえる。

「泣ぐ子はいねがー！」 福を願うなまはげ行事

の「お食事処海鮮屋」へ。見渡すとご近所さんたちも来ているみたい。常連さんたちは美味しそうにフライなどの日替わりランチを食べているみたいだったけれど、今日しか来られない私は迷わず海鮮丼を注文する。とろけるように甘いえびやいか、新鮮な歯ごたえあるマグロや鯛が贅沢に丼の中で光り輝いている！あら汁も磯の香りたつぷりで大満足だ。

なまはげラインと呼ばれるドライブコースに入ると、青い空の下両側に広大な田んぼが続く、米どころらしい風景に出迎えられた。気持ちよくドライブしていると、今度は青銅色のなまはげ像を道路脇に発見！P.C橋のなまはげ大橋だ。渡り始め



◀▲ **なまはげ大橋**
男鹿国定公園の外周にあるドライブルート、なまはげラインに架かる橋長250mのPC6径間連結T桁橋。親柱になまはげの銅像が立つ。

ると、眼下に「男鹿の棚田」が広がっているのに気が付いた。刈り入れは既に終わっていたけれど、春に水を張った時や夏の青々とした稲、刈り入れ前の黄金の海も、きつと素晴らしい眺めだろう。

どこか神聖な空気が漂う山道に入って間もなく、「なまはげ館」に着した。

「なまはげ」の語源は、「ナモミを剥ぐ」がなまったものなのだとか。ナモミとは、炬端でぬくぬくと怠けている人の手足にできる火斑のこと、これを剥ぐために出刃包丁を持っている。どうしよう、こたつで低温やけどの経験がある私にも絶対来ちゃう！

なまはげという存在がいつ生まれたのか、伝説の始まりにはいくつか説があり、謎が多い。地区によって面の顔つきや風習も違うのだけど、おしなべて今は年の終わりに災禍を払い吉事を与え、新年の豊作などを願う来訪神として伝承されている。特に男鹿のなまはげは山に住まう神の化身とされ、昔からの伝統を受け継いでいるそう。本来なら大晦日じゃないと会えないなまはげに何とか会いたい！と探し当てたのが、隣接する男鹿真山伝承館だ。

囲炉裏のある部屋を前に待っていると、ズバン!! とものすごい勢いで障子が開いた。「泣ぐ子はいねが、怠け

者はいねが！」と大声を出しながら家じゅうをどかどか歩き回る。実は先ほどフォトスポットでお面をつけてみたのだけれど、視界が狭くて歩き辛かった。事前の「なまはげは足元が見えづらいので通路を開けておいてください」とのアナウンスがよく理解できる。家を一周したなまはげは主人にお膳や酒でもてなされ、じつくりと家の様子を聞き取り始めた。最初の荒々しさが嘘のように丁寧なフォローだ。なまはげは村の男が神社でお祓いを受けて扮するから、雪深く移動もままならない集落で、助け合い生きていくために伝わってきた行事でもあるのだろう。最後に餅をもらってなまはげは去っていく。なまはげが家にぽつぽつと落ちていった稲わらは、短いものは金運を、長いものは巻くと病が治つたり頭がよくなったりするらしい。一本、願いを込めて拾わせてもらった。

映画をきっかけに訪れた秋田は、訪れてみると雪国に生きてきた人々の創意工夫が、他にない文化やグルメを生み出して興味を尽きない場所だった。何といってもさまざまなかPC構造物に物語のあるものが多く本場に面白い！秋色の秋田は堪能できたので、次は季節を変え、また違う顔を見に来てみたいと思う旅だった。



▲ **男鹿真山伝承館**
男鹿の典型的な曲家(まがりや)と大晦日のなまはげ行事を再現・体験できる館。

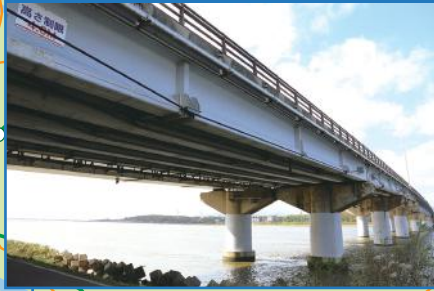


▲ **なまはげ館**
ユネスコ無形文化遺産に登録された「男鹿のナマハゲ」をはじめ、男鹿市内の各地区に伝わるなまはげの面や伝承を横断的に展示・紹介する施設。

なまはげ大橋 (p.09)



男鹿大橋 (p.08)



第一玉川橋梁 (p.03)



秋田県立美術館 (p.06)



新強首橋 (p.04)



雄物大橋 (p.05)



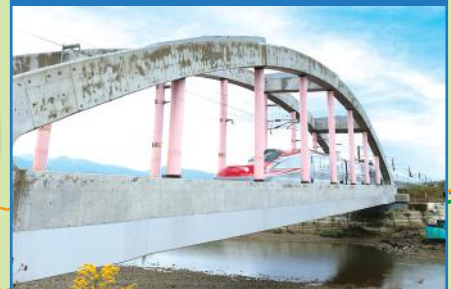
秋田南大橋 (p.07)



豊岩配水池 (p.07)



斉内川橋梁 (p.03)



秋田

秋色の秋田に
魅せられて

旅MAP

齋彌酒造店
発酵小路 田屋
(p.04)

青柳家薬医門 (p.02)
角館武家屋敷通り (p.01)

抱返り溪谷
(p.02)